



令和5年度 苫小牧市非核平和事業

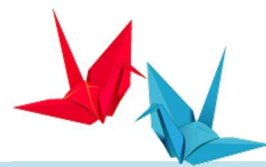
平和の翼

苫小牧市中学生広島派遣事業体験感想文集

苫小牧市政策推進課

目次

◆	中学生広島派遣事業を終えて「苫小牧市職員 奈良 さおり」	・・・▶	1
◆	植苗小中学校 9年 齋藤 美優	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・▶	3
◆	沼ノ端中学校 3年 海沼 来伽	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・▶	5
◆	啓明中学校 3年 兼松 風歌	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・▶	7
◆	和光中学校 3年 井上 柊佳	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・▶	9
◆	勇払中学校 3年 大町 日南	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・▶	11
◆	事業の様子	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・▶	13
◆	苫小牧市非核平和都市条例条文	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・▶	19



苫小牧市総合政策部政策推進課
主事 奈良 さおり

本研修は、次代を担う子どもたちが被爆地である広島を訪問し、戦争と平和に対する意識を高め、その経験等をもとに市民に平和の尊さを考える機会を設けてもらうことを目的に実施しています。本研修は平成7年から行われており、実施回数は27回目を迎え、派遣された人数は今回の派遣者を加え140名となりました。

今年度は、7月21日に事前学習、7月28日に市長表敬を終えて、7月31日から8月2日までの3日間の日程で行いました。

研修初日は、早朝に苫小牧市役所を出発し、飛行機を乗り継いで広島市に行きました。まず向かったのは平和記念資料館です。ここでは当時の惨状を物語る写真や絵画、被爆者の衣服や日用品などの遺品が展示され、一つ一つ丁寧に説明文が書かれていました。来場者の中には外国人が多く、世界的に関心が持たれていることを感じました。派遣者たちは1時間半程自由に施設内を見学した後、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館へ向かい、研修室内で“豊永恵三郎”さんの被爆体験講話を聞きました。

原爆が投下されてから78年経過しており、実際に被爆に遭われた方からお話を聞くことができたのはとても貴重な体験になりました。豊永さんから渡された平和のバトンを次の世代へ引き継いでいく責任を派遣者たちも感じたことと思います。

講話終了後は、施設内を見学し、豊永さんから教えていただいた平和記念公園内の原爆供養塔へ行き、お参りをして研修1日目が終了しました。

研修2日目は、始めに平和記念公園内の原爆死没者慰霊碑に手を合わせた後、原爆の子の像に向かい、苫小牧市民の方や派遣者たちが通う中学校の方々が思いを込めて作った千羽鶴を奉納してきました。

その後本川小学校へ向かい、ガイドの“岩田 美穂”さんのお話を聞きながら本川小学校平和資料館を見学しました。岩田さんは母親が被爆者でありその体験を語り継いでいます。とても胸を締め付けられる内容に戦争の恐ろしさ、平和の尊さを再確認しました。

本川小学校は被爆した実際の校舎の一部をそのまま資料館として保存しています。壁が壊れたまま残されていたり、黒い雨と思われる跡が壁に付いていたり、当時の様子が窺えました。

本川小学校の後は原爆ドームを見に行き、研修の2日目が終了しました。

研修3日目は移動のみであり、派遣者全員無事に苫小牧へ帰り本研修は終了しました。

本研修を通して派遣者たちは原爆がどれほど悲惨な結果をもたらすか、平和なことがどれだけ幸せかを学ぶことができたと思います。この学びが派遣者たちの想像力を育み、自分の行動や社会情勢が将来どのような結果をもたらすか考えることで、戦争のない平和な世界を選択していく力になると思います。貴重な経験をした派遣者たちにはそこで学んだこと、感じたことをより多くの人に伝えることで平和の輪を広げて欲しいと思います。

最後に、今回の広島派遣事業を実施するに当たり、御理解と御協力をいただいた皆さまにこの場をお借りして感謝申し上げます。





私たちは広島を訪問しました。広島は青く、ビルや住宅が立ち並び、通勤通学する人、観光客で街には活気が感じられました。そんな広島がかつて悲惨な状況になっていたなんて想像もつきませんでした。

今から78年前1945年8月6日、空から突然降ってきた原子爆弾によって、広島では多くの自然と共に尊い命が一瞬にして消えてしまいました。原爆による被害は、瞬時に、かつ無差別に多くの命が奪われること、放射線による被害がその後も長年にわたり人々を苦しめていることです。多くの命を奪い、生き残った人々の人生も変えた核兵器の残酷さを感じます。



平和記念資料館で一番心に残っているのは佐々木禎子さんの折り鶴です。禎子さんは2歳の時に被爆し、被爆の10年後に白血病になり、12歳で短い生涯を終えました。折り鶴を千羽折れば願いが叶うと聞いた禎子さんは菓子の包み紙などで鶴を折り続けました。実際に繊細に折られた数多くの鶴を見て、禎子さんの「生きたい」という強い思いが伝わってきました。現在の社会では、「生きられる」ということが当たり前になり、生きたいという思いを失いかけている人が多くいると思います。過去には戦争があったために、生きたくても生きられない人がたくさんいました。健康で家族がいる、食べることができる、そんな私たちの今の生活がどれだけ幸せなことなのか、しみじみ感じさせられました。禎子さんの「生きたい」という思いがより多くの人に伝わってほしいです。

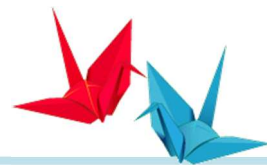
次に、被爆者の一人で語り部をされている豊永さんのお話を聞きました。豊永さんは当時9歳で、爆心地から約10km離れた病院に向かっている途中、真後ろでドカーンとすごい爆発音がしたそうです。家族が心配になり、すぐ自宅に引き換えそうとしましたが、なかなか電車は来ませんでした。広島から来た電車には、火傷で顔は真っ黒、服はボロボロで皮膚が垂れ下がった人間が乗っていました。その姿は幽霊のようで怖かったと豊永さんは言っていました。そのような光景を想像するだけでゾッとしてしまいます。当時9歳の豊

永さんが見た光景がどれだけ恐ろしかったのか、悲しく苦しい思いをしたのだろうと心が痛くなりました。そして豊永さんが一番伝えたいこと、それは「次はあなた達が平和を守ってほしい」ということ。豊永さんは多くの人々が広島に来て、原爆の悲惨さを知ってくれて嬉しいと言っていました。平和のためにできることは人それぞれです。私は、一人一人が自分には関係ないと目をそらすのではなく、過去の人々の思いを受け止めることが平和への第一歩になると思います。

私は実際に広島を踏み、被爆した建物や命を失った人々の数多くの遺品を目にしました。また、悲痛な思いをしたのにも関わらず当時の状況を語ってくれる被爆者の思いを聞くことができました。私は何度も何度も恐怖を感じました。戦争は絶対にはありません。私たちは平和のバトンを受け取りました。「次はあなた達が平和を守ってほしい」と伝えてくれた被爆者の思いを強く心に刻み、平和な世界のために私たちが今できることは何なのかをよく考えて生きていきたいです。



沼ノ端中学校 3年 海沼 来伽



1945年8月6日午前8時15分、アメリカの戦闘機 B29 エノラ・ゲイが原子爆弾“リトルボーイ”を広島に投下。一瞬で無差別に尊い命が奪われました。一般に鉄の溶ける温度は約 1,500℃、大型の台風でも風速は 30m~40m と言われていますが、原子爆弾の威力はすさまじく、熱線は地表面で 3,000℃~4,000℃、爆風は秒速 440m にも及びました。強烈な熱線と爆風を放出した原子爆弾は後に、世界中で語り継がれることとなりましたが、原子爆弾が投下された当時は、何が起こったのか分からないまま、多くの人々が亡くなっていました。



3日間の研修の中で、広島平和記念公園や原爆の子の像など、たくさんの場所を訪れましたが、特に私の心に強く残ったのが被爆者の豊永恵三郎さんの講話です。

豊永さんは8月6日の早朝、中耳炎の治療のため、市外の専門医院へ受診しに行ったそうです。診察後、病院の最寄り駅で電車を待っていると本来なら電車は来るとは思わなかった方角からきのこ雲が上がりました。不気味なきのこ雲の中にはきっと家族や友達がいるだろうと思った豊永さんは、怒りを覚えたそうです。「米英鬼畜」という言葉が真っ先に頭に浮かび、黒煙の中に、当時のアメリカの大統領のルーズベルトとイギリスの総理大臣だったチャーチルの顔が見えてきたといいます。その後、豊永さんは奇跡的に家族との再会を果たしましたが、食べ物などすべてが不足していた当時は毎日生きることに精一杯だったそうです。なので、8月9日に長崎に2つ目の原爆が落とされたこと、15日には終戦したということは記憶にはなく、だいぶ時間が経ってから知ったといいます。そして、終戦後、日本はアメリカの占領地となり、広島にもたくさんのアメリカ人がやって来ました。初めはアメリカ人に対し、豊永さんは複雑な感情を抱いていたそうですが、学校で習ったアメリカ人の印象とは実際には全然違って、優しいアメリカ人達をすぐに好きになったそうです。このお話を聞いて、私は本当かどうか分からないことを根拠なくして信じて

しまうことの恐ろしさを実感しました。We are right “私たちは正しい” というのは、戦争の大義名分から読み取れる言葉ですが、この頭文字を取ると、war “戦争” を意味する言葉となります。本当は嘘かもしれないのに、勝手に決めつけ、人にそれを信じ込ませる。戦争は日本で今、起こっていないからこそ客観的にとらえてしまう部分が多いですが、このような出来事は生活の中でも起こりうることです。その時に自分はどう行動すべきなのか、豊永さんのお話を通して考えさせられました。

原爆によって、一瞬にして変り果てた日常。研修では教科書だけでは知ることができないことを見て、感じて、学ぶことができました。日本は“非核三原則”を、苫小牧市は北海道内で唯一“非核平和都市条例”を制定しています。世界に目を転じてみると、現在も各地で紛争や内乱が起こっています。日本だけでなく、世界の恒久平和を実現するために私たちに何ができるのか。私は、平和について考え続けることを通して、平和のバトンをつないでいくことを誓います。





今から約80年前、第二次世界大戦も終わりに近づき、日本の戦力も弱まってきたころ、8月6日、広島に原子爆弾が投下されました。一瞬、ほんの数秒間で多くの罪なき尊い命が奪われてしまいました。それだけではなく、多くの建物やたくさんの素晴らしい歴史、そして、人々の思い出までも奪いました。また、被爆者のこれからの人生も苦しめていくことになります。わたしたちは、このような悲惨な歴史を繰り返すことのないよう、広島の被爆について正しい知識を得るため、そして平和を維持するためにわたしたちがすべきことを学び、それを多くの人に知ってもらうため、実際に被爆した広島に3日間の研修に行ってきました。



今回の研修では、平和記念資料館内の見学、実際に残留放射線によって被爆した語り部の豊永恵三郎さんから被爆体験についてのお話、そして、実際に被爆した本川小学校で資料館の見学をしました。平和記念資料館、本川小学校では、実際に被爆した物や被爆者の想い、そしてその後の後遺症などについて学ぶことが出来ました。真っ黒に焦げて変形してしまっているもの、ひどく焼けていてぼろぼろに破けてしまっている服、人の形が影として残っている壁、ひしひしと伝わる緊張感は、当時の情景を思い浮かばせ、戦争の残酷さをわたしたちに訴えかけてくるのでした。被害を受けたのは原爆が投下された8月6日だけではない、長い年月が経った今でも苦しめられ続けている、と。8月6日以降、たくさんの方が亡くなり、たくさんの方が体に、そして心に深い傷を負いました。でも時が進む限り、生きていくしかありません。そこで次に被爆者を苦しめたのは後遺症です。症状としては脱毛症やがんなどがあり、それは被爆者の子どもにも影響を及ぼす可能性がありました。なので被爆者は、日々強い不安と共に生きてきたことと思います。わたしたちはその不安を1つでも多く取り除く事ができるよう、一緒に考えていくことが大切だと思いました。



豊永さんのお話では、とても心に残ったことがあります。それは、「自分や家族を苦しめたアメリカやイギリスのことをどう思っていますか。」という質問に対し、「恨む事はないけれど、ひと言でいいから、アメリカやイギリスに謝って欲しい。」と答えていたことです。長い年月の間苦しめられたであろう、原爆を落としたアメリカやイギリスに復讐したいなどの考えは持っておらず、ただ謝ってほしい。それであの悲劇の被害者である方たちの気持ち

が救われるのなら、どうかアメリカやイギリスにはこの問題に真剣に向き合ってほしいと思います。

今回の研修で、私たちは平和のバトンを受け取りました。このバトンが途絶えることがないように、また自国だけではなく世界中の人々に渡す事ができるよう、バトンを増やし、次世代に託していこうと思います。今ある幸せを大切に、そしてその幸せが永遠に続くように願っています。



和光中学校 3年 井上 柊佳



私たち5人は、派遣事業に参加し、7月31日から8月2日の3日間、原爆が落とされた広島で、戦争の怖さと平和の尊さについて様々な事を学習しました。広島に到着してから、最初に行ったのは、平和記念資料館です。この平和資料館には、被爆前の広島の街の写真や当時中学生だった生徒の集合写真なども飾られていました。その写真に写る生徒は全員笑顔でした。しかし、1945年8月15日午前8時15分に投下された原爆によって、無差別に多くの人の命が奪われ、生き残った人の人生も大きく変わりました。そんな広島



島の街は、一瞬で焼け野原となり、木は幹だけとなりました。資料館には、「思わず頭を下げた瞬間、突然全身が異様な閃光に包まれる」という瞬間を描いた絵や、被爆者が実際に着ていた血の色が残る焼けた服など、様々な物が展示されていました。被爆後はきのこ雲が立ち上がっていました。青い空でも、赤い空でもなく、黒味がかかった朱色の空が広がっている写真もありました。被爆者の中には生き残った方もいましたが、全身に火傷を負った人や、片目が無くなった人、頭・顔・手足などの骨が見える様になってしまった人など、たくさんの被爆者の写真が残されていました。被爆時は生きることが出来た人でも、気がつかないうちに放射線を浴びていて、後日亡くなった方も多かったということから原子爆弾はとても怖いと改めて実感しました。中学2年生の時に、英語の授業で2歳の時に広島で被爆した佐々木禎子さんについて学びましたが、その時は話がよく分かりませんでした。なぜ、「原爆の子の像」が出来たのかも分かりませんでした。資料館に行くと、どのような生活を送っていたのか詳しく学ぶことが出来ました。広島に毎年納められる折り鶴が再生利用されている事も英語の授業で学びましたが、紙粘土だけではなく、折り紙や紙袋、メモ帳などにもなっていて驚きました。8月1日に訪問した本

川小学校は、被爆地から近く唯一残った小学校で、他の場所では学ぶことが出来ないような事がたくさんありました。広島県産業奨励館バルコニーの柱が展示されていました。御影石という石が使われており、元々は表面がつるつるしていましたが、被爆した際に石が焼け、現在は手触りが変わっています。実際に触ってみると、表面はざらざらしており、



表面がつるつるしていたとは思えませんでした。他にも本川小学校の校庭が死体の火葬場となっていた時の写真や原子爆弾が投下された後の学校の写真などが飾られていました。実際に広島の土を踏んで様々な事を学ぶ事が出来ました。今生きている人の中に、原子爆弾の被害を受けた人はほとんどいないと思います。戦争を経験したことがないから自分達には関係ないと思うのは間違っています。被爆者が少なくなっている今、日本の平和を守っていくのは私達です。広島の方から受け継いだ「平和のバトン」を多くの人に繋ぎ、今後も平和な状態が続くことを願っています。



私は、「苫小牧市中学生広島派遣事業」に参加しました。派遣事業は7月31日から3日間の猛暑の中で行われました。78年前の8月6日、午前8時15分、私たちが体験した温度よりも遥かに高い3,000℃という熱線が広島のを燃やし、地獄に変えました。そんな戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさ、そして広島の人々の思いに触れ、学んできたことを伝えたいと思います。



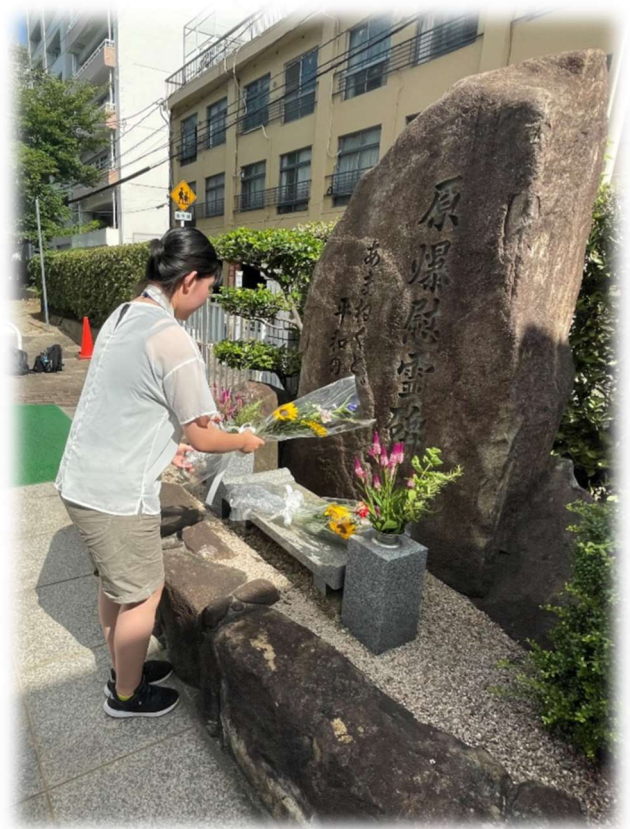
研修1日目は、平和記念資料館を見学した後、被爆体験の講話をしている豊永さんのお話を聞かせていただきました。資料館では、原爆が投下された直後の広島を知ることができました。写真、服や小物、建物の一部、遺書など、様々な形で当時の広島の思いに触れ、改めて戦争は多くの人を苦しめたのだと、身をもって感じました。たくさんの資料の中に「人影の石」というものがありました。「人影の石」とは、銀行の開店前に石段に座っていた人が被爆し、熱線がその人のまわりを白く焼いたため、座っていた部分だけが焼けず影として残った、というものです。「人影の石」を目の当たりにして、ここで亡くなったという恐怖と悲しみで、言葉が出ませんでした。たくさんの資料がある中、私が最も考えさせられたのは、出口付近にあった1枚の写真です。「我が子を抱いて」という題名のその写真には、笑顔で赤ちゃんを見つめる家族が写されていました。ついこの間まで数多の地獄を見てきた、今も大変なものには変わりはないはずなのに、それでも希望を見つけ、笑顔で生きていけるその家族に感動しました。ある日記には「俺は絶対死なない。」とも書かれていました。一見、とても勇敢な物に見えますが、この文章を見ると戦争への怖さや責任など、たくさんの感情が読み取れました。平和資料館には、戦争の悲惨さの中に人々の「生きる力」がありました。私も、簡単に諦める姿を見せず、何事にも全力で取り組んで行動していきたいと思いました。



研修2日目は、宮島で観光をしたあと、本川小学校を訪問しました。本川小学校は爆心地からわずか410メートル。400人の生徒が在籍していて、モダン造りの美しい校舎だったそうです。しかし、原爆が落とされ、生き残ったのは生徒1名、教員1名のみ。実際に中に入ってみると、足元はでこぼこで、気を付けて歩かないと転びそうなほどでした。壁も床もさわってみると普通のコンクリートと大差は無く、本当にここで多くの人々が亡くなったのか信じられませんでした。その後、当時下駄箱として使われていた地下室でお話を聞かせてもらいました。お話を聞いていると、段々と当時の様子が明らかになり、すごく悲しい気持ちになりました。

自分より年下の小学生の命が一瞬のうちに失われてしまうことも、小学校につまったたくさんの思い出が傷つけられることも、絶対にあってはいけないことだと強く思いました。

中学生の私にできることは、限られているかもしれませんが、今回の派遣事業で学んだことを無駄にせず、より多くの人にあの日広島でおきた事を伝え、これからも平和について考え続けていきます。



事業の様子

令和5年7月21日（金） オリエンテーション・事前学習

研修当日の役割分担やスケジュール、注意事項を確認し本番への準備を行いました。

その後、事前学習として原子爆弾投下後の広島のカンパチを鑑賞し、研修本番に向けて平和学習をしました。



令和5年7月28日（金） 市長表敬

オリエンテーション・事前学習を終え、広島派遣者で市長表敬を行いました。

それぞれ自己紹介を行い、研修に対する意気込みや研修に参加した動機を語り、岩倉市長から激励の言葉をいただきました。

6月19日～7月3日まで設置していた、折り鶴コーナーにより、今年度も市民の皆さまからたくさんの折り鶴をいただきました。

集まった折り鶴をボランティアサークル「キルト♡ポエムとまこまい」の皆さまに千羽鶴にしていただきました。

御協力ありがとうございました。



令和5年7月31日（月）～ 8月2日（水） 本研修

《1日目》7月31日（月）

- * 広島平和記念資料館見学
- * 語り部・豊永恵三郎さんによる被爆体験講話を受講

《2日目》8月1日（火）

- * 広島平和記念公園内「原爆の子の像」へ千羽鶴を奉納
- * 本川小学校平和資料館慰霊碑へ献花
ガイドの岩田美穂さんによる解説と見学
- * 世界遺産「厳島神社」見学

《3日目》8月2日（水）

- * 帰苦

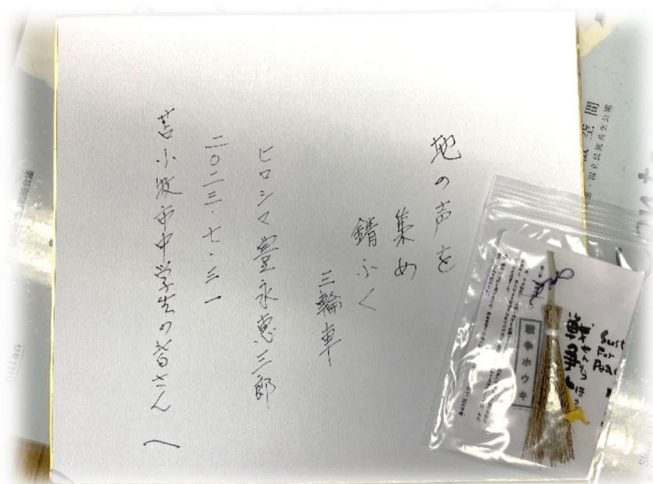


広島平和記念資料館見学、豊永恵三郎さんによる被爆体験講話

1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分。広島に世界で初めて原子爆弾が投下され、その年の12月末までに約14万人の人々が亡くなりました。

平和記念資料館には当時の情景を物語る様々なものが展示されていました。黒こげになった弁当箱、当時の光景を描いた絵、高熱で溶けたガラス瓶など、被爆した方の遺品の数々と共にその遺品等に対するメッセージが展示されていました。

その後、残留放射線によって被爆した語り部の豊永恵三郎さんから、被爆体験についてお話をいただきました。当時を経験された豊永さんの講話は大変貴重な経験となりました。



▲講話後に豊永さんから頂いた色紙

平和記念公園、本川小学校平和資料館

【平和記念公園】

派遣者の在籍する各中学校の生徒が作成した千羽鶴と、苫小牧市民の皆さまから寄せられた折り鶴で作成した千羽鶴を『原爆の子の像』へ捧げました。

【本川小学校】

本川小学校は爆心地から350m離れたところにあり、原爆により約400人の児童と校長先生のほか10人の教師が一瞬にして命をうばわれました。

この平和資料館は、昭和3年に広島で初めて建てられた鉄筋3階建ての校舎の一部で、被害を受けた状態をそのまま残し、被爆の「証」として保存されています。展示されている写真や遺物には、多くの人々の悲しみや願いが込められています。

ガイドの岩田美穂さんから岩田さんの母親が体験したお話や当時から現在までの小学校の様子をお話いただきました。



▲奉納した千羽鶴



▲本川小学校資料館



▲資料館前の慰霊碑



▲岩田さんの説明を聞く様子

令和5年8月15日（火） 苫小牧市平和祈念式典

終戦の日に行われた平和祈念式典では、海沼さんが派遣者を代表して広島派遣の体験感想文を發表し、派遣者全員で平和の誓いを朗読しました。

▼体験感想文を読む海沼さん



▼「平和の誓い」を朗読する様子



『平和の誓い』

皆さんには大切な人はいますか？

日常を振り返ってみると、家族や友人、学校や職場の人など、たくさんいると思います。

今から78年前の1945年8月6日、広島に原子爆弾が投下され、大きなきのこ雲が上がり、広島は街は一瞬で焼け野原となりました。

この原子爆弾によって無差別に多くの命が奪われ、人々の生活は大きく変わりました。

奪われたそれまでの生活は、もう二度と戻ってくることはありません。

78年たった今でも、苦しみ、悲しみ続けている人がいるのです。

8時15分で止まった時計が、当時の悲惨な出来事を生々しく物語っていました。真っ赤な炎が広島を焼く光景が目には浮かびました。

私たちは原爆の地を踏み、平和な日常を一瞬で奪っていく戦争を二度と起こしてはならないと感じました。

そして、失われた多くの命を無駄にしないため、今ここにいる私たちが平和な未来を守っていく責任があることを強く実感しました。

日本だけでなく、世界中の人々が戦争による支配を受けず、大切な人々と笑顔で暮らしていけるように、私達に何が出来るのかを考え、行動に移していくことを誓います。

事後研修～各中学校での体験発表～

▼和光中学校 井上 柊佳 さん



▼植苗小中学校 齋藤 美優 さん



▼啓明中学校 兼松 風歌 さん



▼勇払中学校 大町 日南 さん



▼沼ノ端中学校 海沼 来伽 さん



広島派遣事業の事後研修として各中学校で派遣者による体験発表を行いました。実際に被爆地に行き、感じたことや見たものを他の生徒達にも伝え、平和について考えてもらう時間を設けました。それを聞いた皆さまは、家族や友人に伝え、一人でも多くの市民の方々に広がることを願っています。

協力していただいた各中学校の皆さまありがとうございました。



▲戦没者慰霊日

平和記念公園にある戦没者慰霊日からは、原爆ドームを臨むことができます。公園内では平和記念式典の準備をしていました。



▲平和記念公園の「原爆の子の像」

2歳の時に被爆した佐々木禎子さんが、10年後に白血病で亡くなったことをきっかけに、同級生たちが慰霊碑をつくろうと呼びかけ、昭和33年に完成しました。



▲原爆供養塔

平和記念公園内にある大きな塚で、身元や氏名などが判明しない約7万人の原爆死没者の遺骨等が納められています。



▲原爆ドーム横のベンチ

原爆ドーム横の歩道には川に沿ってベンチがありますが、その並びに原爆ドームの崩れた柱の一部が置かれていました。

苫小牧市非核平和都市条例

わたしたち苫小牧市民は、安全で健やかに心ゆたかに生きられるように、平和を愛するすべての国の人々と共に、日本国憲法の基本理念である恒久平和の実現に努めるとともに、国是である非核三原則の趣旨を踏まえ核兵器のない平和の実現に努力していくことを決意し、この条例を制定する。

(目 的)

第1条 この条例は、本市の平和行政に関する基本的事項を定め、市民が安全で健やかに心ゆたかに生活できる環境を確保し、もって市民生活の向上に資することを目的とする。

(恒久平和の意義等の普及)

第2条 市は、日本国憲法に規定する恒久平和の意義及び国是である非核三原則の趣旨について、広く市民に普及するように努めるものとする。

(平和に関する交流の推進)

第3条 市は、他の都市との平和に関する交流を推進するように努めるものとする。

(その他平和に関する事業の推進)

第4条 市は、前2条に定めるもののほか、平和の推進に資すると認める事業を行うように努めるものとする。

(平和の維持に係る協議等)

第5条 市長は、本市において、国是である非核三原則の趣旨が損なわれるおそれがあると認める事由が生じた場合は、関係機関に対し協議を求めるとともに、必要と認めるときは、適切な措置を講じるよう要請するものとする。

(核兵器の実験等に対する反対の表明)

第6条 市長は、核兵器の実験等が行われた場合は、関係機関に対し、当該実験等に対する反対の旨の意見を表明するものとする。

(委 任)

第7条 この条例の施行に関し必要な事項は、市長が定める。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

(平成14年4月1日公布)



【 発 行 】

苫小牧市総合政策部政策推進課

所在地：〒053-8722 苫小牧市旭町4丁目5番6号

電 話：0144-32-6039 FAX：0144-34-7110

E-mail：seisaku@city.tomakomai.hokkaido.jp

(令和5年11月30日)